

「わがまま」は如何ほどにして！？

第10期 石井 隆太

大学に入ってから、深刻な悩みが1つ。それは、私が、わがままじゃなさ過ぎることです。わがままじゃないというのは、「あの服が着たい」、「この靴が履きたい」、「どこどこへ旅行したい」、「あの音楽を聞きたい」、「このスポーツがしたい」、「あれが食べたい」、「この酒が飲みたい」、「スマホに替えたい」、「あの家に住んでこんな家具が欲しい」という類の主張がほぼ皆無ということの意味します。そういう人は、誰かに与えられたことに反発せず、むしろ満足してそれを受け入れるわけですから、他人に迷惑もかけず、周囲から好かれることが多いはず。しかし、裏を返せば、そんな人は、自分がどうしてもやりたいことがないという、往々にして何ともつまらない人であるように思います。ですから、「〇〇が食べたーい♪」から「将来は、〇〇を成し遂げたい」まで、私の目にわがままな人は、大変うらやましく映ります。

そんな私にとって小野ゼミがどんな存在であったかは、私のゼミでの活動を見てこられた方には周知のとおりだと思います。大学で「どうしても、これがしたい」と積極的に言えることは、ゼミだけでした。そう言うと、ゼミにしか生き甲斐を感じられない寂しい人のように聞こえますが、わがままじゃなさ過ぎる私にとって、つまらない人から脱却する唯一の希望を見つけれられたことは、非常に有り難いことでした。

ゼミは、私を魅了する人であふれていました。まずは、同期。ゼミでは、ゼミ長という役職に就いていました。「入る論文チームがないよ…」と泣く同期の相談に乗ったり、タバコを投げつけて居たたまれなくなった同期を自宅に泊めてみたり、「えー、うちがやるのー？」とダダをこねる同期をなだめてみたり、「皆には内緒だけど、ゼミ辞めるかも」という突然の告白を全力で受けとめたり、大体そんな日々です。役職の恩恵も受けて、多くの個性豊かな同期と接することが出来たことは、大変幸せでした。

次に、大学院生の先輩方。小野ゼミの最たる売りは、大学院生の存在であると信じています。大学は、就職斡旋機関でもなければ、就職までのモラトリアムを過ごすユートピアでもありません。世界で起きている多様な現象を理解するために、科学という方法を用いて自由に学問をすることが許された唯一の空間です。そうした大学本来の目的のために生き、学問を行く行くは職業にしようと思わず大学院生の先輩方と出会えたことは幸せでしたし、先輩方のお蔭で、私も学問を志してみたいと思えるようになりました。

そして、小野晃典先生。先生ご自身、あるいは、魅力的なゼミ生と接する場を提供して頂いたことに、大変感謝しております。先生のように知性と情熱あふれる人を目指して、今後も精進していく所存です。

「わがまま」というのは、読んで字の如く、まさに「我がまま」であることを指し、他人とは全く違う道を行くわけですから、その道には当然不安も伴います。しかし、小野ゼミに入ってやっとわがままになれた私は、この先も、もっともっとわがままでありたいと、我がままな道を行きたいと、そう強く思います。